

東洋文化講座・シリーズ「大陸から目白へ」学習院の東アジア学資料」講演録

第八一回 東洋文化講座（二〇一三年一月一日）

朝鮮の出版文化

藤本幸夫

こんばんは。藤本でございます。

ただいま杉田善弘所長及び辻大和さんからご懇切なるご紹介を賜りまして、誠にありがとうございます。研究所では『李朝実録』を初め、朝鮮学に関する多くの書籍を刊行しておられます、そのほかにまた朝鮮総督府関係の録音資料等を購入され、それらを文字化して提供していただいております。朝鮮学に非常に大きな貢献をいただいております。私は朝鮮学の片隅に身を置いておりますけれども、常に謝意と敬意を抱いております。本日はそのような、私が常に敬意を抱いておりますこの大学で、このような機会を賜りましたことを大変光栄に存じております。

私は朝鮮語学と朝鮮文献学が専攻でございます、富山

大学に昭和五十三年に朝鮮語・朝鮮文学科というのができました。これは国立大学で初めてできた講座で、現在もただ一つの講座でございます。そこで朝鮮語を教えて参りましたが、他方では日本にある朝鮮の文献を調べてまいりました。四十余年過ぎましたけれども、日本には朝鮮半島全体、今は北朝鮮と韓国に分かれておりますが、そちらにもないような本がたくさんございます。

現存の理由は、豊臣秀吉が朝鮮に侵略した時に、配下の武將達が将来したこと、その後江戸時代は対馬を通じての入手、そして大部分を占めますのは、朝鮮が開国した後日本人の学者等が購入したものでございます。その際には個人によって様々ですけれども、古い本に関心を持っている

人は、随分貴重な本を購入しております。ちょうど敗戦にかかって、持ち帰って来られなかった方は、向こうにその本を置いたままとなりました。それは非常に残念なことでしたが、敗戦も間近になって来ますと、帰って来られない、物をも送れないという状況でした。戦前に帰国された方々は持ち帰っておられ、その中には大変貴重な本もたくさんございます。

それから高句麗・百濟・新羅、或いは統一新羅の頃、日本では奈良時代を中心とした頃に、多量の仏書などが流入したに違いありませんが、現在確認されているのは皆無に等しい状態です。新羅の僧の著書が幾度も書き写されて伝わり、現存するものもありますし、それらが江戸時代に木版で印刷され、現在に伝わるものもあります。現在の韓国、北朝鮮には古代の資料はほとんどございませぬので、日本で探し出そうと、近年韓国から多くの研究者が来ております。僧名は中国僧・朝鮮僧・日本僧の区別が難しく、国籍不明の著者が多くおります。その中から古代朝鮮僧の著書を探し出そうとするのでございます。本日は私の四十余年の経験を基にいたしまして、朝鮮の出版文化について簡単にご紹介申し上げたいと存じます。

周知の如く古代は中国を中心に文字文化が発展して参りましたけれども、東アジアの文字文化を考える上で、朝鮮は極めて重要な位置を占めております。しかし残念ながら

朝鮮古資料の伝存は、日本に比べ遥かに乏しいのでございます。日本は中国文化の溜り場で、古いものが次々に伝わって層を成し、朝鮮はその通り道みたいなものだ、とよく言われます。日本のほうが寛容、寛大といつてもいいのでしゅうか、いろいろなものを受け入れて、そのままに保つため、様々な種類のものが伝わっております。朝鮮の方は日本に比べますと、単純明快で、許容度が低いと言えるかもしれません。

新羅時代は日本の奈良時代のように、様々な宗派の仏教があつたのですが、一四世紀末から始まる朝鮮王朝になりますと、殆ど禪宗一筋になつてゆきます。禪宗では不立文字、つまり坐して悟るのであつて、文字は要らないなどと申します。これは極端な話で、実際は禪宗でもいろいろな語録とか文集などが出ております。しかし日本では現在も続く天台宗や真言宗では教理を研究するため、多量の仏典を必要とし、また産出してきました。日本では特に天台宗や真言宗のお寺に、仏典を中心とする古資料が多く保たれております。

又朝鮮では高麗末に朱子学が伝来しますと、四書五経は、新注、つまり朱子の解釈に従うようになり、それ以前の解釈、すなわち旧注は顧みられなくなります。日本では朱子の注釈も受け入れ、江戸時代には徳川幕府の官学になりましたが、他方京都の貴族では旧注を保ち、また陽明学も行

われました。このように重層的にいろいろなものが残っているというのが、日本文化の大きな特徴だと思われれます。

近年韓国では古文獻、古資料を発掘しようという、これは一つにはナショナルリズムとも関係あると思われれますが、自分たちは非常に優れたものを持っている、それでそれらが発掘しようという動きが、国家的レベルで行われております。大学や研究所が国から五年等という期限付きで研究費を受け、日本や欧米に行つて調査研究し、写真を撮つて解題をつけるなどの作業が次々と行われています。韓国はIT化が随分進んでいますので、それと結びついて画像化され、公開されています。

また韓国では近年地方自治体が資料館などを設置しています。例えば慶尚道はその昔新羅のあったところで、多くの学者を輩出し、多量の書籍を出版して来た所です。現在も多数の旧家があり、そこには様々な資料が保存されているので、資料館ではそれを預かり、その代わりに目録を作成し、又展示会をします。韓国では家柄を非常に重視しますので、その資料が展示されるということは、そのお宅にとつても光栄なものですから、進んで資料の提供が行われると聞きます。また旧家に保存されてきた、先祖の文集などを出版した時の版木も、同様に寄託を受けています。このような営為の中から、貴重な資料が発見されることもあります。

例えば最近『至正條格』という元代の法律の本が、完全ではありませんが発見されました。これは中国では既に見られたものです。また『老乞大』という本も発見されました。これは十五世紀の初めに朝鮮で使われました中国語を学ぶための、通訳官用の教科書でございます。朝鮮人が中国に行つた時に通訳が必要となりますが、その通訳を養成する司訳院で使う教科書の一つでございます。この『老乞大』は元代の口語で書かれているため、中国語学の見地からも貴重な資料と重宝されています。

それからまた『金藏論』という高麗本も発見されています。『金藏論』は中国北朝末期の六世紀後半に成立した仏教の因縁譚を集めたもので、日本には奈良時代に齋来されていたことが文献から確認できますが、院政期の興福寺写本が一卷伝わるだけでした。ところが敦煌から写本残簡が確認され、更に高麗木版本の出現に至りました。高麗本は巻一至四で、巻一に目録が収録されていたため、初めて全体の構成が判ることとなりました。この本は『今昔物語』の典拠になっているので、日本文学にとつても貴重な資料ということが出来ます。このように朝鮮本は、単に朝鮮文化においてだけではなくて、日本、中国にも非常に関わりを持ち、貢献するものでございます。

一 新羅木版印刷本『無垢淨光大陀羅尼經』

前にも少し触れましたが、朝鮮には高句麗、百濟、新羅の三国があり、そのうちの新羅が唐と同盟を結んで高句麗、百濟を滅ぼし、統一新羅（六七七～九三五）となりました。まだこの時代は一般的には写本の時代でございます。中国でも写本が中心でした。中国では仏像や曆を印刷することは多少はありましたが、まだまだ主流は写本でした。新羅ももちろん例外ではありませんが、お手元の資料にある『無垢淨光大陀羅尼經』というお経一卷は、新羅の木版本と云われています。これは慶州仏国寺の釈迦塔から発見されました。一九六六年九月三日に盗賊が塔をジャッキで動かして、塔中に納入された宝物を盗もうとしたのです。しかし完全に動かし切らず、翌朝お坊さんが見ますと塔が傾いているということ、文化財管理局に通報いたしました。そこでソウルから文化財関係の役人や学者がやって来て、十月十三日にこの塔を解体しました。するとその中から金銅製の箱や仏舍利等、様々な納入品が出てまいりました。上記の『無垢淨光大陀羅尼經』一卷もその中に含まれていました。虫損があり、前部数行が失われていますが、その後は比較的よく保たれています。当時は巻物ですので、そのお経は高さ六、五糎、横六四七糎で、紙を十四枚張り継いだものでした。

ただ、それが何時入塔されたか判りません。仏国寺は七五一年に創建されておりますので、この時には当然塔もできていますから、七五一年以前に納入されたものと考えられます。本経は唐の則天武后の末年（七〇四）に觀貨羅人釈迦陀山によって、梵文から漢訳されたもので、その写本又は木版本が新羅に齎され、それに基づいて木版印刷されたものと思われまゝ。従って刻版の時期は七〇四至七五一年、つまり八世紀前半であると看做し得ます。また本経と共に発見された考古学的遺品も、八世紀前半と考えられます。しかし唐で刊行された木版本の本経が、新羅に齎されて納塔された可能性も皆無ではありません。本経には楮紙、即ちコウゾが用いられており、新羅では楮紙を使用していたことは、新羅の僅かな現存写経からも確認されます。唐では楮紙の使用例は少なく、本経を新羅の印刷物と考える可能性が強まります。

日本を代表する書誌学者に川瀬一馬先生という方がいらっしゃるが、私は一九八二年にお供してソウルで本経を拝見しましたが、川瀬先生は本経を八世紀のものと思做してもよからうとおっしゃいました。ただ後に唐の木版本であろうと述べておられます。またその際破損部の裏打ち補修のために、御所蔵の古代紙を提供し得ると申し出られましたが、その話は結局見送られました。その後日本の業者が補修に当りました。

ところが二〇〇七年十月二九日付『朝鮮日報』によりまずと、一九六六年に納入物が発見された時、墨書の塊も出ていましたが、それはその後国立中央博物館で保管されて来ました。一九九〇年代になって同館で墨書の調査を始めましたところ、「釈迦塔を高麗時代に修復した」という記録が出てきたので、研究を中止することになったと云います。それは『無垢浄光大陀羅尼經』が新羅の印刷物であるという信憑性に関わるからです。その後この事実が言論界で明らかにされるや、本格的な文書判読作業が開始されました。文書は幾重にも折畳んであり、折り目が殆ど切れているため、元の続き具合が判りません。研究者がそれを克服して判読すると、以下のようなことが判明しました。大まかに述べますと、高麗顯宗十五年（一〇二四）に塔を解体修理した時、新羅時に入れた『無垢浄光大陀羅尼經』一卷が出て来、それを再び納塔しました。その十四年後の靖宗四年（一〇三八）に大地震が起こり、再び修理を施しましたが、その時ある僧が同經一卷を新たに入れたといえます。ところが一九六六年の発見時には、『無垢浄光大陀羅尼經』が一卷しか出てきませんでした。とすると、現在国宝に指定されている『無垢浄光大陀羅尼經』は、新羅の印刷物なのか、高麗の印刷物なのかという、大問題が浮上してきます。現在韓国の学会では新羅の木版印刷物と看做しています。

それから新羅の写經ですが、現在韓国に伝存するのは十点以内と思います。日本には奈良時代末以前の写本が数千点伝わります。仏教は百済を経て伝えられ、また種々の文化も高句麗・百濟・新羅から齎されたため、当然仏書も多く流入しているはずですが、日本伝存の古写本、その多くは写經ですが、その中には古代朝鮮の写經が混在するに違いないと思われてきたのですが、識別は困難でした。日本の写經には本文末に奥書の記されることがよくありますが、朝鮮では奥書が殆ど見当たりません。これは朝鮮全時代を通じて、写本のみならず書籍でも同様です。

近年に至って、新羅写經ではないかと推定されるものが出現しました。山本信吉氏によれば、正倉院所蔵『大方広仏華嚴經』卷七十二至八十は、新羅写經であろうと云います。その根拠として、この經は縮約經であること、界線が無いこと、また一行十七字という形式を守っていないことなどが挙げられています。仏典は聖典ですので、勝手に縮めたりすることができないものです。また一行十七字というのは、中国・朝鮮・日本に共通する写經上の約束事です。これらは日本では確認されないことです。朝鮮には縮約經があるといえます。ところが更に決定的な事実が出てきました。それは小林芳規教授の発見に係りますが、東大寺所蔵『大方広仏華嚴經』卷十二至二十は、正倉院所蔵本と僚卷ですが、本文右傍に角筆で日本の送り仮名に当る文字が

記されています。例えば処格に「良」字の草書体、所有格に「叱」字の旁である「匕」字が用いられています。これらは新羅時代に用いられた文字遣いで、日本の訓読では用いられません。従って角筆で読みを付した新羅写経『大方広仏華嚴経』が、奈良に齎来されたと考えても良いと思われまふ。角筆とは、象牙や木製の箸状の先の尖った筆記具で、料紙に窪みをつけて文字やオコト点を記します。小林教授は角筆研究の權威で、日本、中国、韓国から角筆資料を発見しておられます。

二 高麗時代の出版文化

(一) 木版印刷

高麗時代(九一八—一三九二)になりますと、中国はもとより、高麗でも本格的に木版印刷の時期になってきます。印刷形態は、中央及び地方の役所での刊行の官版、寺での刊行の寺刹版、或いは個人の家での刊行の私家版に分けることができます。出版された書籍の一部の書名が伝わるだけで、書籍自体は残念ながら殆ど伝わってはいません。

現在高麗の木版本で比較的多く伝存するのは、官版の大蔵経です。大蔵経には初彫及び再彫の二度に亘る刊行があります。初彫大蔵経は、一〇一一年に契丹が来寇した時、その退却を祈願して彫られた五千巻を超える大部なものです。この版本は永らく符印寺に蔵置されていましたが、

一二三一年の蒙古襲来時に焼き払われてしまいました。そこで前回と同じく大蔵経の彫刻を試みて、一二三六年から一二五一年にかけて刻しましたが、これが再彫大蔵経です。後者は版本が今も韓国の海印寺に伝わります。初彫大蔵経は現在一部分のみが伝わりますが、韓国に僅か、日本により多く伝存します。再彫大蔵経は日本に完本が数蔵伝わっています。再彫大蔵経は日本に完本が数蔵伝わっています。再彫大蔵経は日本に完本が数蔵伝わっています。再彫大蔵経は日本に完本が数蔵伝わっています。

初彫大蔵経と再彫大蔵経の間に、續蔵経というのがあります。これは高麗の王子で僧となつた大覚国師義天が、仏典の注釈を中国及び朝鮮から蒐集編纂したのですが、現在には殆ど残っていません。日本ではこれをもとにして、必要な仏典を木版印刷しています。義天は日本にも書簡を送つて、日本僧の注釈書を求めていますが、実現しませんでした。

高麗時代は上述のように基本的には木版印刷が中心の時代でした。写本も当然行われていましたが、世界的に見ても特徴的なことは、金属活字印刷が行われていたことです。私どもは学生時代金属活字印刷というのは、ドイツのグーテンベルクが一四四〇年代に始めたと習っていました。しかし朝鮮ではそれより二百五十年ほど前に、既に行われていたことが明らかになっています。最近高麗の旧都開城から活字の実物が発見されています。以下高麗金属活字印刷についてお話しします。

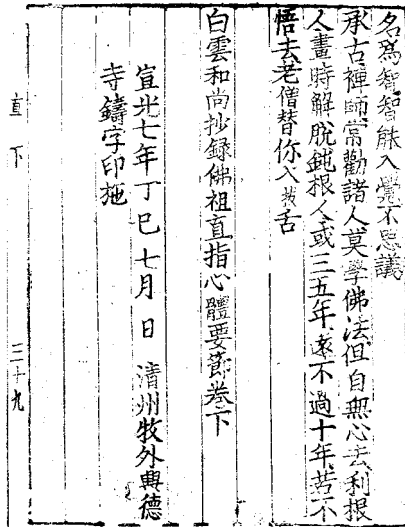
(二) 金属活字印刷

活字印刷については宋人沈括『夢溪筆談』に、畢昇なる人物が慶暦年間(一〇四一—一〇四八)に「膠泥」を用いて活字を作り、鉄板の上に敷き詰めて印刷したという記述があります。「膠泥」が何を指すのか、明白ではありませんが、粘土のようなものと考えられています。その後元人王禎はその著『農書』(一三三三)で陶活字・錫活字・木活字について触れ、自身が作らせた六万余の木活字で一ヶ月足らずで『旌徳県志』一〇〇部を完成したと記しています。また敦煌からは十四世紀初頭のウイグル文字木活字も発見されています。

さて、高麗金属活字印刷についてですが、『古今詳定礼文』の序文に「鑄字で二十八部」を印刷したという記録があります。「鑄字」とは、「鑄造した文字」、即ち金属活字を意味します。そしてこの本は序文から、高麗が蒙古軍の侵略によって首都開城から江華島に遷都した一二三二年から、序文の撰者李奎報の死亡した一二四一年の間頃に刊行されたと考えられます。従来はこの記録によって、十三世紀の前半に高麗で金属活字印刷が行われていたと認識されておりました。

ところが一九七二年パリにあるフランス国立図書館から、高麗金属活字本『白雲和尚抄録佛祖直指心體要節』巻下の一冊が見つかりました。この書の巻末に「宣光七年丁

巳七月 日 清州牧外興徳寺鑄字印施」という刊記があり、宣光七年丁巳(一二七七)七月に清州牧の外にある興徳寺で、鑄字、つまり金属活字で印刷したことが判ります。これは現存する金属活字印刷物として、世界最古のものとして知られています。これが活字本であることは、印刷面からも見取ることができます。皆さんのハンドアウトをご覧ください。先ず文字面に一字単位でまだらに濃淡があります。これは活字の高さがそれぞれに異なっているところから生じる現象です。また文字の傾いているものがあります。そして文字間に空間があり、上下の文字が噛み合うことは



現存世界最古高麗金属活字本『白雲和尚抄録佛祖直指心體要節』巻下第39張表(1377年7月刊)

基本的にはありません。この活字には大小二種類の活字が用いられていますが、大字で書かれている本文の中に、理由も無く小字が混在しています。これは入れるべき大字が見つからないために、小字で代用したものです。それから版心に「直指 幾」のように、省略書名と張次が記されています。この部分も活字が用いられていますが、末張の版心部の「指」字がありません。これは印刷中に抜け落ち、印刷者はそれに気付かなかつたからと思われるます。これらは印刷面が活字印刷であることを示す特徴です。また印刷方法についても興味深いことが、印刷面から判ります。それは上に述べた版心の書名「直指」の「指」字に二種類の字体が用いられており、それが交互に現れています。それからこの印刷に用いられた、活字を配列するための植字版が、二版使用されていたことが判ります。これは西洋の活字印刷を描いた絵を見ても、一方では植字版の上に紙を充てて印刷しており、他方では植字版に文字を植えています。但し植字版は必ずしも二面を用いるとは決まっておらず、早く刷ろうとする場合には多くの植字版を用いることもありました。

ハンドアウトに『南明泉和尚頌證道歌』（略称『證道歌』）がございます。これは高麗時代の木版本の後刷りとされますが、本書は本文末の刊語に寄れば、この書の失伝を懼れて、一三二九年に刻手を募って鑄字本を重ねて彫したとあ

ります。つまり『證道歌』には元來鑄字本、即ち金属活字本があつて、それをもとにして一三二九年にこれを覆刻したのです。もとの金属活字本が何時出版されたかは判りませんが、恐らく二十〜三十年前と考へても良からうと思われまします。この木版本『證道歌』の印刷面を見ますと、文字間に空間があり、上下の文字が噛み合わず、また文字の歪みも確認されて、覆刻の元になつた書が活字本であつたことを物語っています。

ところで二〇〇四年にこの『證道歌』の印刷に用いられた銅活字が、旧都開城から発見されました。以前にやはり開城から発見されたという銅活字二字が知られていましたが、今回は一五〇余字が報告されています。韓国の南権熙教授によれば、『證道歌』の文字と此度発見された銅活字とを比較対照した結果、新発見の活字が『證道歌』を印刷した活字と認定されました。新発見の活字は三種類に分けられますが、第一・二種は墨が付着しているので使用されていたもの、第三種は墨の付着がなく、未使用のものです。第一・二種の形態は、共に裏面が凹状に窪んでいます。第一種は活字の左右側面の下部が左右に突出しており、第二種はそれがありません。第三種も裏面は凹状に窪んでいます。四隅に脚があつて、活字を支えています。付着した墨を韓国及び日本の研究機関に依頼して、放射線炭素年代分析を行ったところ、十世紀から十三世紀のものとい

う結果が出ました。これは活字本『證道歌』の刊行年代とほぼ合致します。この当時の金属活字印刷部数は、恐らく三十乃至五十部程度であったろうと思われませう。

三 朝鮮時代の出版文化

(一) 木版印刷

朝鮮王朝(一三九二〜一九一〇)もやはり木版印刷が中心でございます。印刷書が少ないため入手できない、或いは貧しいために購入できない人は、やはり写本を行っておりました。朝鮮が活字の国だというのは、中国や日本では活字印刷が少ないため、非常に良く目立つからです。また文化・学芸の中心となる出版書が、中央政府で活字を持つて印刷されたため、そのような印象を与えています。朝鮮で嘗て出版された書籍全体から見れば、活字本は一パーセントにも満たないと思います。

印刷形態は、中央及び地方の役所での刊行の官版、寺での刊行の寺利版、個人の家での刊行の私家版、碩学を奉祀した書院、営利出版をする書肆等に分けることができます。私家版は高麗時代に比べると、遥かに多くなります。特に十七世紀以降には増加しますが、一族内に配るのが中心であるため、出版部数も五十〜百部程度で、出版部数が少ない時には木活字のほうが安価なので、木活字印刷が盛んになります。また一族の系譜である族譜の出版も盛んになり

ますが、出版部数が少ないため殆ど木活字が用いられていきます。書院は碩学が講学した所ですが、その碩学の没後は学統を継承する弟子達が講学を引き継ぎました。そしてその学統に属する人々の著書や経学書等を刊行しました。また書肆は十七世紀から見られますが、中国や日本に比べると極めて低調でした。それは書籍を購入し得る階層が殆どいなかったためです。

『攷事撮要』(一五七六)という書の巻末に、ソウルの水標橋の近辺に住む河漢水なる人物が、この書を刻したので買いたい者は尋ね来たれとあります。この頃柳希春という高官がおり、書籍を好んであらゆる手段で蒐集に努めていましたし、また政府の書籍を刊行する校書館の副長官でもありました。その人物の『眉巖日記草』という日記には、書籍に関する記述が極めて多いのですが、書肆に関する記録は全く認められません。上述の河漢水にも全く言及されていません。このようなことから考えて、書肆があつたとは考えがたいのです。

書籍を必要とするのは、全人口からすると数パーセントに過ぎないヤンバン(両班)と呼ばれる知識人でした。書肆がないかわりに、地方の官衙や書院に版木があり、そこに依頼して印刷してもらいました。上記『攷事撮要』はヤンバンが心得るべき事柄を記した書ですが、そこには何処に何書の版木があるかが記載されています。高級官僚の場

合は、地方に赴任している友人に依頼して印刷の上、送ってもらっています。

(二) 金属活字印刷

朝鮮王朝では、ソウルの政府出版機関である校書館、後には奎章閣等で、多くの書籍を出版しました。木版印刷や木活字印刷も行われましたが、高麗王朝の伝統を引いて金属活字印刷が盛んでした。金属活字は銅活字が中心で、その他に鉄活字・鉛活字・真鍮活字もありました。朝鮮王朝最初の金属活字は癸未字と呼ばれますが、鑄造された年(二四〇三)の干支から来ています。活字の名称は、一般に鑄造された年の干支で呼ばれることが多いですが、そうでないこともあります。金属活字が三十余種も出ていますが、何故このように多種なのか、理由は必ずしも明らかではありません。

例えば癸未字の場合には、一行に入る字数が二十字であったり二十一字であったりし、活字の大きさにむらがあるため鑄潰され、庚子字(二四二〇)が鑄造されました。しかしこの字も小さすぎるといふことで鑄潰され、甲寅字(二四三四)が作られました。これは字体がよいため幾度も作り直されて、朝鮮王朝末まで使用されました。当時は紙が貴重でしたので、大部の書を印刷する時のために、やや小ぶりの甲辰字(二四八四)を作りました。大抵の活字

は双行の註を入れるために、縦・横二分の一の小字も作りました。この甲辰字の場合には註用の小字、更にその註用の縦・横二分の一の小字も作りました。鑄造技術の高さが見て取れます。

銅は朝鮮では産出せず、十五世紀には日本から輸入して使いました。そのため銅は高価で、活字が盗まれることがありました。また金属活字は部分的に破損することがあります。活字がなくなると、臨時にその場で木活字を作つて嵌め込んだりします。なくなった活字がだんだん増えて木活字で補っていますと、印刷面が汚くなつてきます。そうすると部分的な鑄造、やがては全面的に鑄造することになります。活字を鑄造するのは鑄字所で、出版するのは校書館が中心でした。医学書は内医院、曆書は觀象監、通訳者用の教科書は司訳院などの官衙で出版することもありました。十八世紀後半の正祖時からは、校書館の代わりに奎章閣で出版を行うことになりました。

金属活字印刷の部数は大体百部ほどです。百部の内、国王・中央や地方の官衙・図書館・政府の刊行書を保存している四ヶ所の史庫などに送り、その他の七十〜八十部は臣下に与えます。出版書ごとに、内容に応じて与える臣下定めます。国王から与えられた書を内賜本又は宣賜本といいますが、これは臣下にとつて大変名誉なことです。高級官僚は大抵毎回刊行書を受け取ることができません。例えば

二十年高級官僚として立朝歴のある人は、三百から四百部ほどは賜っているはずですが、現在それらを完全に保存している旧家はありません。

この内賜本には、第一冊の前表紙の裏に、何時・誰に・何書を与えるという墨記（内賜記）が記されています。子孫が生活に困窮したりして内賜本を手放す場合には、先祖の名に傷がつかぬようにこの内賜記を切除してしまいます。或いは先祖の名前だけを切り取るか、墨で塗りつぶします。朝鮮本は、特に中央や地方の官衙での刊行書では、殆ど刊行の年を書きません。従って朝鮮本の刊行年代を知るのは、甚だ困難を伴います。その点内賜記は刊行年を知る第一級の手がかりとなるのです。というのは、校書館などで出版された書は、直ちに内賜されるため、内賜記に記された年月の直前に刊行されたと判るからです。

終わりに木版本と金属活字本の違いについて触れます。先ず木版本の場合は、木版を作るために山へ行って木を伐採することから始まります。それを版木の大きさに整え、一年ほど陰干しにして水分を抜いたりします。版木の両端に、版木の厚さよりも厚い持ち手をつけます。これは版木を扱う時に必要で、また版木を重ねた時に文字面と文字面が当って破損しないようにするためです。もっとも版木は不要になった古い版木を再利用することも可能です。その場合、以前の不要になった文字面を削り取り、そこに文字

を彫ればいいのです。本になった状態を予想して、原稿紙に行数・字数を定めて、能筆家が染筆します。それを版木に裏返しに貼り付けて彫版しますが、刻版には随分時間がかかります。刻手にも熟練工と未熟工がいます。それによって出来上がりが異なつてきますが、熟練工には手間賃が多く要ります。大部な書籍の版刻には刻手が多く必要ですが、一ヶ所では満たすことができない場合には周辺から呼び集めねばならず、これも大変面倒なことです。木版の保存には広い空間が必要で、また虫や湿気に留意して保存することが必要です。ソウルの校書館などで木版印刷をすると、膨大な版木の収蔵庫が必要となり、無理なことです。しかし木版は必要な時に何時でも取り出し、印刷することができます。従って、購買層が多く、長年に亘って需要が見込まれる時には木版が有利です。版木が割れたり、欠損したりすれば、その版木だけを彫って補えばいいのです。このようにして数百年間版木が用いられることもあります。

他方金属活字は、例えば銅活字の場合は材料の銅が高価なために民間などでは購入が難しく、また活字鑄造には高い技術が必要なために、民間では金属活字を作ることは極めて困難です。一頁に、例えば「之」のような文字は何度も用いられるので、二十個程作らねばなりません。その他の文字も個数は異なつても、複数個準備しなければなりません。それで一種類の活字には、十万個ほど作ります。し

かし金属活字は一旦作っておくと、必要な時に何時でも、比較的簡単に取り出して印刷することができます。といつても、もう一度はじめから植字をしなければなりません。木版のように版木を作り、文字を刻するのに比べると、遙かに容易です。また木版印刷に比べると、それに関係する人数は少なくすみます。活字は大筆筒の引き出しの中に収蔵されるので、保存に広い場所は不要です。活字印刷は刷っているうちに活字が動き、またはずれたりするので、多く刷ろうとすればもう一度植字をする必要が生じます。一度の植字では大体百部ほどであるのは、そこに原因があると思います。従つて木版本のように多量に刷るのではなく、小部数を刷るのに適しています。

木活字は材料が木であるため作製に費用もそれほどかからず、木版を彫る作業に従事している者ならば簡単に作れ、高度な技術は要りません。軽いために持ち運びに便利で、小部数を短期間に安価で印刷できます。十七世紀以降先祖の文集や族譜の出版が盛んになりますが、活字を所有する農民が農閑期に木活字を担いで希望者宅に行き、住み込んで数十部を短期間に、しかも安価に作製しました。木活字は金属活字と木版の中間的存在といえます。

中国や日本で活字印刷が主流とならなかつたのは、購読者層が大きかつたからです。従つて民間の書肆が成立しました。朝鮮では購読者層が少なかつたため、書肆は大きく

発展しませんでした。朝鮮で国家的に普及を図る場合は、ソウルの校書館などで校正を厳密にし、金属活字で印刷した書を地方の官衙に送り、地方の官衙ではそれを解体して版木に貼り付けて彫りました。そうすると版木に彫るための原稿を作る手間は省け、校正の確かな、内容の均一の書が、全国各地で出ることになります。これは賢明な普及法ともいえます。

以上で私の朝鮮出版文化に関する簡単なお話を終えますが、朝鮮は優れた出版文化の伝統を持つております。金属活字印刷では、これまで世界最初と言われて来たドイツのグーテンベルクの印刷より、二百五十年ほど前に行われていたと考えられ、現存の金属活字印刷書でも七十年ほど先によつて、古書の発見も相次いでいます。東アジアの文化研究には朝鮮に更に多くの目が注がれるべきだと考えます。

ご清聴ありがとうございます。感謝申し上げます。

(了)